

⑦ 『災い転じて』

西からの偏西風を受けて船は順調に航海を続け、三日後には大坂に着いた。

大潮の満潮時らしく、舷側と棧橋の間に掛けられたあゆみ板の傾斜がきつい。その上、歩く度に板が大きくたわんでゆさゆさと揺れた。

掴む物がないあゆみ板の真ん中で、ミチは転落の恐怖にしゃがみ込んでしまいそうになった。

先を進んでいた男の子は、さつさと渡り切ってこちらを向き、もどかしそうな顔をして立っている。

もう少しであゆみ板を渡りきるというその時、背後で大きな罵声が聞こえた。

「おらっ！何をまたついてやがる。邪魔だ、どきやがれ！」

その声とほぼ同時にミチは棧橋に降り立った。

するとそこへ、あゆみ板をぎゅっぎゅっとしならせながら大股で男が降りて来た。

続いて降りて来た別の男が前を歩く男を突き飛ばしたのか

「何をしやがる！」と叫んだ男がミチに体ごとぶつかると覆いかぶさるように二人もつれて

棧橋に転がってしまった。

突き飛ばされた男は

「野郎！」と叫びながら立ち上がると、転がっているミチには目もくれず、突き飛ばした男を追ってすさまじい勢いで駆け出した。

ミチは一体何が起こったのか分からないまま頭を持ち上げて、走り去る男の後姿を見送った。

立ち上がろうとするが踏ん張りがきかない。突き飛ばされたはずみでぶつけたのだろう、両膝と左腕がひどく痛んだ。

見ると左手の手甲が黒く汚れて血が滲んでいる。胸元から両の膝まで矢張りべっとりと汚れが付いて、膝頭辺りは着物が擦り切れていた。

そつと裾をめくってみると、左の膝から血が流れて脛を伝っていた。慌てて手拭を引き裂いて巻きつけ、左手もしばった。

「もう大丈夫、さあ行きましょう」そう言つて男の子を促し歩き始めたが、左足は引きずりながら歩くのがやつとだった。

目指す難波の店は簡単にみつかった。簡単に見つけられるほど大きな海産物を扱う大店だった。

店先を掃いていた丁稚らしい若い男に要件を伝えると、

「へっ、暫くお待ちを」と言い残して男は奥に駆け込んだ。

暫くして戻つて来た男に先導されて、二人は手入れの行き届いた中庭を横切り奥座敷の前に案内された。

縁先から奥に向かって男が声を掛けると、障子が開いて六左衛門と名乗るあるじが姿を現した。

細身の体に大島の着物がよく似合つて、綺麗に結い上げられた髪と、白い元結が清々しく見える。

六左衛門は、ミチのひどい姿が気になつたらしく

「おや、その姿はどないしました？」と尋ねた。脇に立っている男の子については、とつくに承知していると云った風だった。

ミチが船を降りた時の出来事を説明すると、にわかには六左衛門の顔が曇った。

「失礼ですが、懐の物は大丈夫でしょうか」とミチの顔を覗き込んだ。言われた瞬間、六左衛門の言葉の意味が理解できず

「えっ？」と聞き返したミチだったが、懐に手を入れてみて、六左衛門が言った言葉の意味が分かった。

三田尻で船賃を払った後、懐にしまったはずの巾着が無い。どういふことだろう。たちまちミチの顔から血の色が消えた。

旅は始まったばかり。路銀の総てを失ってこれから先どうすればいいのだろう。

ミチの動揺に気付いた六左衛門が

「やられましたな。恐らく二人はぐるですな。最近はこの手の乱暴な巾着の切りが多いのですわ」そう言いながら六左衛門は、仕事に戻りかけた丁稚を呼び戻して、女中を呼んで来るように言いつけた。

男の子を届ければミチの用は終り。六左衛門に頭を下げ、男の子にも一度顔を向けると

「しつかりね」と言つて引き返そうとした。

「ちよつとお待ち下さい。着物の破れ具合からすると怪我をされてるに違いない。破れを繕い、怪我の手当をしてから出立されてもよろし

いでしよう」

六左衛門が優しく微笑んだ。

傷の手当を済ませ、女中が持つて来た借り物の着物に袖を通すと、離れの茶室に案内された。

にじり口の奥では、既に六左衛門が炉の前で茶を立てる準備をしていた。茶釜からはうつつすらと湯気も昇っている。

向かいに座つた女房のセキが、優しく微笑んでミチを近くに、とうながした。

痛む膝を無理に畳んでお辞儀をし、頭を上げたミチの目は、床の間の柱に掛けられた一枚の短冊にくぎ付けになった。

『三井寺の門たゝかばやけふの月 はせを』と読める。芭蕉の句？そう思った瞬間、激しい衝撃で顔が引きつるのを感じて、ミチは短冊から目が離せなくなった。

思いもしなかつた所で、全くふいに、永い間思い描いてきた偉人の句を目にするなど、そう云う事があるのだろうか。

いつまでも短冊を凝視しているミチに気付いた六左衛門が

「あゝ、それは近江の友人から無理矢理に譲つて貰つたものですわ。よろしおまつしやる」と言いながら、少し自慢げに小鼻をふくらませた。

最終的にその世界に辿り着きたいと願っている芭蕉の句は沢山読んできた。けどそれらは総て写本の中。真筆を目にしたのは今日が初めてだった。

言葉にならない驚きと感激が、ミチの身体を熱くした。

頭陀袋には、萩で羽仁殿に書いて貰った美濃の傘狂への紹介状が入っている。その傘狂は美濃派の重鎮。美濃へ行くには途中近江を通る。三井寺も石山寺も寄るつもりでいた。

その三井寺を詠んだ俳聖の真筆に、思いもしなかった場面で出くわすとは、何という幸運なのだろう。

大坂の港でスリに巾着を盗まれた。そればかりか膝にひどい怪我までさせられ、これから先の道行きが案じられた。

ひよつとすると、その怪我のお蔭で芭蕉の短冊に会えた？ そう思うとむしろ幸運だったのかも知れない、と痛む膝をさすりながらミチは考えた。

一枚の短冊が三人の話に花を咲かせた。それだけではない、まるで十年来の知己のように打ち解けたやわらかな空気に包まれていつまでも話は尽きなかった。

六左衛門は、裕福な商人のなぐさみという以上に、女房共々俳諧の道に深かった。そのことがミチをすっかり安心させた。

この夫婦なら、連れて来た男の子も不足なく奉公が出来るに違いない。そう思えた。

女房のセキはしきりに、急ぐ旅でなければ暫く留まるように勧め、六左衛門に同意を求めた。

六左衛門も

「その怪我の様子では長旅は無理だす。治るまでゆっくりするとよろしい」と大きく頷いて女房の言葉に同調した。

始まったばかりの旅で巻き込まれた事件の所為で、これから先の道行

きを心配しない訳にはいかなかったが、三田尻の港で男の子の面倒を頼まれなければ、今こうして芭蕉の短冊に出会う幸運は無かったに違いない。

そう思いながら、萩を発つミチの背に手を当てて暖かく見送ってくれた聞心院老師を思い出していた。

総ては阿弥陀様の思召しなのだ。身に起こるあらゆる事柄、例えそれが禍であれ福であれ、それをそのまま受け入れる事がすなわち修養。

これから先、旅を続け、俳道を歩き、仏に仕える為には、何よりもあるがままを受け入れる事が大切なのだ、と思えてきた。

ミチは六左衛門夫婦の提案を素直に受け入れる事にした。

「お世話にならせて戴きます」と頭を下げたミチを見つめた夫婦の顔が、安堵の表情に変わった。

六左衛門は大きくうなずいて女房を見やり、その顔をミチに向けた。黒い眉と大きな鼻を持つ、かなり強面の顔に優しい微笑が浮かんだ。